

授業を受けてくれたみなさんへ

平井 太規

(元コミュニティ政策学科教員)

コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科（以下、コミ政と略することがあります）には、2020年4月から2023年3月までお世話になりました。この3年間、様々な面でご指導、サポートをくださいました学部の先生方とスタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

退職した教員は、本誌に「退職された先生からのメッセージ」として寄稿することになっています。いずれは執筆することになると分かっておりましたが、こうしていざ執筆する機会に直面すると、どのようなメッセージを残すべきか、なかなか悩ましいのが正直なところですが、せっかくの機会に恵まれましたので、ここでは3年間の在任中、私の授業を受けたコミ政の学生の皆さんに、一足早く立教大学を「卒業」した者として、以下の2つのことをお伝えしたいと思います。

第一に、「対面できる機会を有効に活用してください」。

私がコミ政にお世話になった3年間は、ちょうどコロナ禍と重なる時期でした。着任早々に、1回目の緊急事態宣言が発令され、授業も会議もすべて非対面のオンライン／オンデマンド形態に切り替わりました（これまで経験したことのない授業形態に対応するべく、様々な準備やシミュレーションを個人であるいは先生方と協働で行ったことは、今となっては懐かしい思い出です）。2022年度から、ほとんどの授業が対面に戻りましたが、特に2020年度入学生の学生たちにとっては、大学生活の最初の2年間でキャンパスで授業を受ける機会に恵まれなかったということで、辛い時期であったと思います。

この3年間で担当させていただいた授業のひとつに「社会調査実習」（質問紙調査やインタビューなどを実践しながら、社会調査のスキルとノウハウを1年間かけて学ぶ演習形式の授業、社会調査士資格科目のG科目に該当）がありますが、2022年度受講生のあるグループが、以下のような興味深い知見を見出していました

た。すなわち、(1) コミ政の学生たちは、おおむね対面、オンライン、オンデマンドのいずれの形態の授業においても満足している、(2) しかし、オンラインやオンデマンドの授業形態に満足していても、それが必ずしも学生生活の満足度を高めるわけではない、(3) 対面授業の満足度が高まると、学生生活の満足度が高まる、ということです。対面形態でない授業における学生の授業満足度は決して低いわけではないものの、学生生活が充実している（と認識できる）かどうかを決定付ける要因のひとつに、対面授業の満足度があるようです。

対面授業の満足度が高いというのは、教員が直接学生に教授する環境があるというだけでなく、キャンパス内で学生同士が学びあう機会があること、授業の前後や休み時間などで学生同士の直接的な交流があること、などがより高いレベルで実践されていることの総体としての意味かと想像しますが、いずれにしても、学生が対面授業を享受することによって得られるものは、私たち教員が考えるよりもはるかに意味深いものとなっているのだと思います。

コロナ禍を通して、私たちは、Zoomはじめ、わざわざ遠出しなくてもコミュニケーションできるツールの有用性に気づかされました。一方で、対面でしか、伝えられないこと、共感できないことなどの貴重さを改めて思い知らされました。これからの社会は（業界にもよりますが）、状況やニーズに応じて、対面と非対面を使い分けていくことが増えていくことになるかもしれません。また、想像したくはないですが、コロナに替わる新たなウイルスが世界的大流行になることが生じれば、再び非対面のみのコミュニケーションしかできなくなる可能性もゼロではないでしょう。

誰かと対面する際に、「この人と直接会えるのは、これが最後かもしれない」と常に考えている人はあまりいないと思います。それでも今、この瞬間に、誰かと対面できること自体がもしかしたら、奇跡なのかもしれません。その意味で、コミ政の学生のみなさんには、キャンパスの内外で同じ学科の友人たちと、サークルや部活の仲間たちと、アルバイトの同僚と、地域の方々と直接触れ合える一瞬一瞬を本当に大切にしてほしいと願っています。

第二に、「大学卒業後に、自分のために自由に活用できる時間は思っているほど多くはないかもしれません」。

コミ政学科の学生のみなさんのほとんどは、卒業後、社会人として活躍されるでしょう。社会人は学生時代と違って時間がないというのはご想像の通りです。とはいえ、人生90年時代ともいわれている中、社会人になったあと70年近く生

きることを想定すると、時間はたくさんあると思われるかもしれませんが。しかし、健康寿命を考慮すると、健康で、介助や看護を受けることなく自由に創造的な活動ができるのは、実質残り50年ほどになります。更に、結婚して子どもを持つという経験をすれば、子どもが10歳くらいに成長するまで、ほとんど自分の時間は持てないでしょう（家事や育児を誰かに任せっきりにするとか、完全に外部委託するとかになれば別ですが）。それを踏まえると、残り40年。しかし、子どもがある程度の年齢になって自分の時間が持てそうと思ったら、今度はキャリアアップしたり、仕事上で責任を伴う範囲が広がったりで、労働時間が増えてますます時間がなくなる可能性もあります。それらをすべてひっくるめて考えると、本当に自由に活用できる時間は10～20年ほどしかないかもしれません。一見すればある程度の年数ですが、残りの人生70年分の10～20年にしか過ぎないのです。

もちろん、これは起こり得るひとつのシナリオに過ぎないため、誰もがこのような状況に置かれるわけではありません。ライフコースによっては、これよりも多くの時間を確保できるでしょうし、反対にもっと少なくなることも考えられます。ただ、時間は有限であること、これは誰にでも当てはまります。社会人になって、初めて時間の貴重さに気づく人が多いように思いますが、はっきり言いましょう、「それでは、遅い」。学生であるうちに、有限な時間をどう有効活用するかを考える癖をつけておいてほしいと思います。

以上の2点、対面機会の貴重さと時間の貴重さを学生のみなさんにお伝えいたします。これからの人生のご多幸を祈願しております。